

令和6年度 第1回 介護福祉学科 教育課程編成委員会 報告書

日時：令和6年10月9日（水）14：45～16：15

場所：zoom形式

参加者名

- 委員 大久保 佳世（社会福祉法人はるび 特別養護老人ホームはるびの郷施設長）
委員 佐々木 幸（公益社団法人東京都介護福祉士会副会長／認知症介護研究研修東京センター客員研究員）
委員 丸山 将司（アビリティーズ・ケアネット株式会社）
教員 細野 真代（介護福祉学科学科長）
教員 岡本 啓介（介護福祉学科教員）
職員 星 朋美（教務課係長）
職員 鈴木 慶紀（教務課）
職員 三村 美緒（教務課）

議題：フィールドワークを用いた授業づくりについて考える

細野教員）

前回の教育課程編成委員会の議題「地域連携について考える」からの半年間、地域の社会福祉協議会等に声をかけてきたが、まだ連携には至っていない。そのため、今回の会議では、実習とは異なる取り組みで、現場も踏まえたフィールドワークを展開していきたいと考えている。その1つとして、直近では、11月に介護過程の授業で、課題を与えて高尾山に登山する計画がある。

またその他、学内で声が上がっている項目としては、施設や企業と連携して、「施設・職種の理解とその発信」「メンターとの地域課題解決」「福祉用具コンテスト」「他校の講義の受講」等を検討しているため、皆様の知見をお借りしてこれらを具体化するための議論を行いたい。

岡本教員）

介護福祉士は、地域や利用者の課題解決能力が求められるが、現場では発揮できていないように考える。そのため、当校では、それらの能力を身に付けさせるためのカリキュラムを構築していきたい。

地域連携について

[各出席者からの意見]

佐々木委員)

求められる介護福祉士像として、「地域の中で、施設・在宅にかかわらず、利用者が望む生活を支えることができる」能力が必要であるとしているため、フィールドワークの授業展開は、期待するところがある。入居施設の利用者は、元は地域住民であり、指定介護老人福祉施設の基準の中では、「在宅に復帰することを念頭に置きながら介護すること」を記されているため、今後は「どうすれば住み慣れた住まいや地域に戻って生活ができるか」という点も念頭に置きながら、地元や地域に視点を向けられるようになると良いだろう。

大久保委員)

地域にとっての施設の役割を、職員や地域の方々も把握できていないところもあるため、まずは施設も地域の一員という共通認識を持てるようにしたい。現在の若い職員は、地域に魅力を感じ、「地域に出たい」と望む職員も多いが、地域の理解を深めないまま外部に出ると困難が多いと考える。そのため、施設が地域にとってどのような存在なのかの役割を職員に教え、地域の方々にも伝えることで、一緒に地域力を高めていければと良いと考える。

また、当施設では、昨年から東村山市とその地域の各施設と連携し、会場を借りて、市内の施設を紹介する動画を、地域の方々が視聴できるようにしていた。これについては、反響があったため、今年はデイサービス版も作成している。このような結果から、地域の方々が施設等に興味があるにもかかわらず、きっかけがないことにより施設が孤立してしまうことがないようにするため、学生がフィールドワークを行う意味はあると考える。

企業連携について

[各出席者からの意見]

丸山委員)

当社は、福祉用具の販売・レンタル等を行っている企業であるが、学校との連携については、ショールームの見学や、学内で商品に触る機会を与えることは可能であると考え。具体的には、福祉用具のコンテストにおいて、商品の貸出を行い、グループワーク等を行って、学生に改善点を求めるようなことであれば貢献できる。そういったところで、商品に触れる・使用目的を知る・商品の分析等を行うことで福祉用具の理解が深まり、福祉用具を広めることができれば良いと考える。

岡本教員)

福祉用具を題材にグループワークを行い、改善点等を発見して、企業の方々に発表し評価をいただく授業展開は面白いと思われる。理由としては、福祉用具についての勉強は必須であり、このような授業展開であれば、想像力を高めることもできるからである。また、老人介護業界では、福祉用具はあるが使用されていない現状から腰痛で体を痛める職員も多い。そのため、学生のうちから福祉用具に触れるべきで、各施設、事業所としても今以上に活用できるようになることが望ましい。今後、生活支援技術のカリキュラムの中で、福祉用具についての学びを深める動きがあるため、そういった関係企業との連携は必須となるだろう。

細野教員)

岡本教員からもあったように生活支援技術のカリキュラムの中で、福祉用具について、どのように学生に伝えていくべきかを、学内で悩んでいたところであった。しかし、アビリティーズ・ケアネット株式会社様等の企業との連携は可能であることが理解できたため、新しい授業展開にすることができるだろう。

佐々木委員)

登山をフィールドワークの授業として取り入れるとのことであるが、福祉用具と絡めると、高尾山はバリアフリーが進んでいるので、とても良いと思う。その中で、例えば登山が趣味である利用者が車いすでどのように登るかという視点で、電車の乗り換えから山頂までのルートを、電動車いす班、標準型車いす班、杖班等に分かれて学生が自分事として調べて、当日実践することで、介護福祉士としてどうしていくべきと、バリアフリーや福祉用具の限界等を把握でき、地域や福祉用具の理解の深化に繋がるだろう。

大久保委員)

私は、東京都社会福祉協議会の東京ケアリーダーズの取りまとめをやっているが、その中で、福祉用具のプロデュースの話題があった。具体的には、今ある福祉用具の改善をしたり、それを企業に提案したりできると良いという話をしていた。学生がこれらのようなことをやると斬新なアイデアが生まれる可能性があるため、現場を知る東京ケアリーダー

ズのメンバーと学生と一緒に授業に参加することで、活性化された授業展開になりえると思う。それと同時に、先日のアクティブ福祉で多くの福祉機器の企業が参加していたが、機器だけではなく、利用者にとって「本当に必要なものは何か」を考える時間も大切に、カリキュラム構築をしていけると良いと考える。

まとめ

- ・課題解決能力の向上のため、フィールドワークを用いた授業の展開を検討しており、直近では授業の一環で、課題を与えて高尾山に登山する計画がある。その他、「施設・職種理解と発信」「メンターとの地域課題解決」「福祉用具コンテスト」「他校の講義の受講」等を検討している。
- ・地域でのフィールドワークについては、利用者の趣味が地域にあることを想定して、介護福祉士として何をやるべきか、利用者の立場になったときにどのようなことが困難になるのかという視点で、当事者意識を持てるような課題を与えながら進めると良い。
- ・企業とのフィールドワークについては、福祉用具を題材に、企業・東京都社会福祉協議会の東京ケアリーダーズ・学校の産官学連携で、授業を展開することで、課題発見能力を向上できたり、新しいものを創出できたりする可能性があるため、今後検討していく。

以上